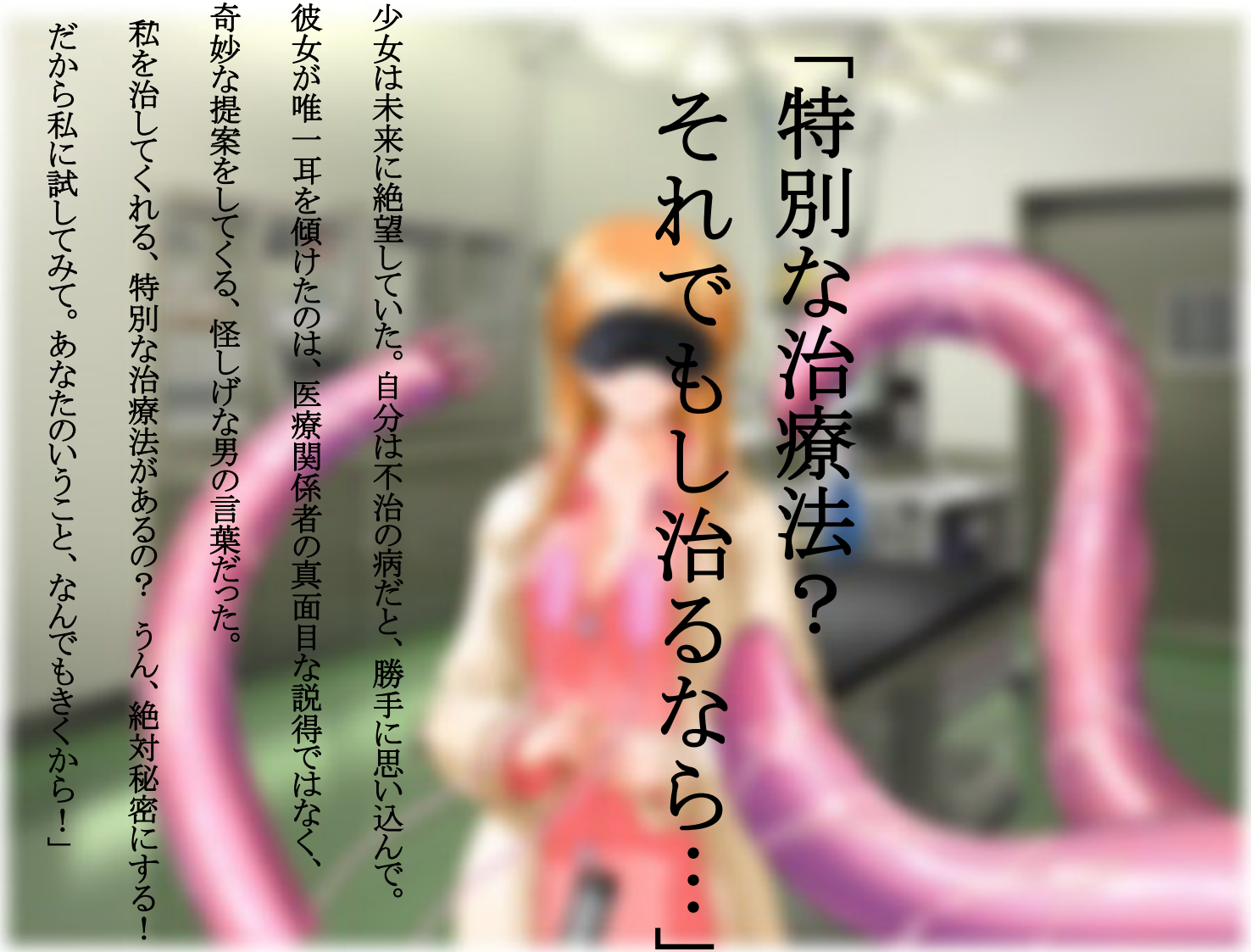

「特別な治療法？
それでもし治るなら…」
少女は未来に絶望していた。自分は不治の病だと、勝手に思い込んで。
彼女が唯一耳を傾けたのは、医療関係者の真面目な説得ではなく、
奇妙な提案をしてくる、怪しげな男の言葉だった。
私を治してくれる、特別な治療法があるの？　うん、絶対秘密にする！
だから私に試してみて。あなたのいうこと、なんでもきくから！」

ふーん、あなたが私を治してくれる人？

なにか特別な治療法があるって聞いたんだけど。

本当に治るのかなぁ……。だって私の病気、

いまの医学では治せないんでしょ？

お医者さんはそんなことないよって言うけど、

私、わかるの。どうしてかって？　勘よ、勘。

あーあ、私ったら、なんてかわいそうなんだろ。

まだ十代で、こんなにかわいいのに、

誰も治せない病気で死んじゃう運命だなんて。

まだエッチもしたことないのに……。

だから、もしあなたの特別な治療法で治るなら

私、なんでも言うこと聞くわ。

ちょっと辛いかもって？　いいわよ、好きにして。

ね、ねぇ。なにかおかしくない？

アイマスクされてるから見えないけど、妙な気配がする……。なんだか生ぐさいし。私の回りに、誰かいるんじゃない？

あっ……！　おっぱいに貼りつけてる小さいのが、ブルブルしてきたぁ。股間に当てられてる棒みたいなのも、うねうねしてきて……はあぁ……。

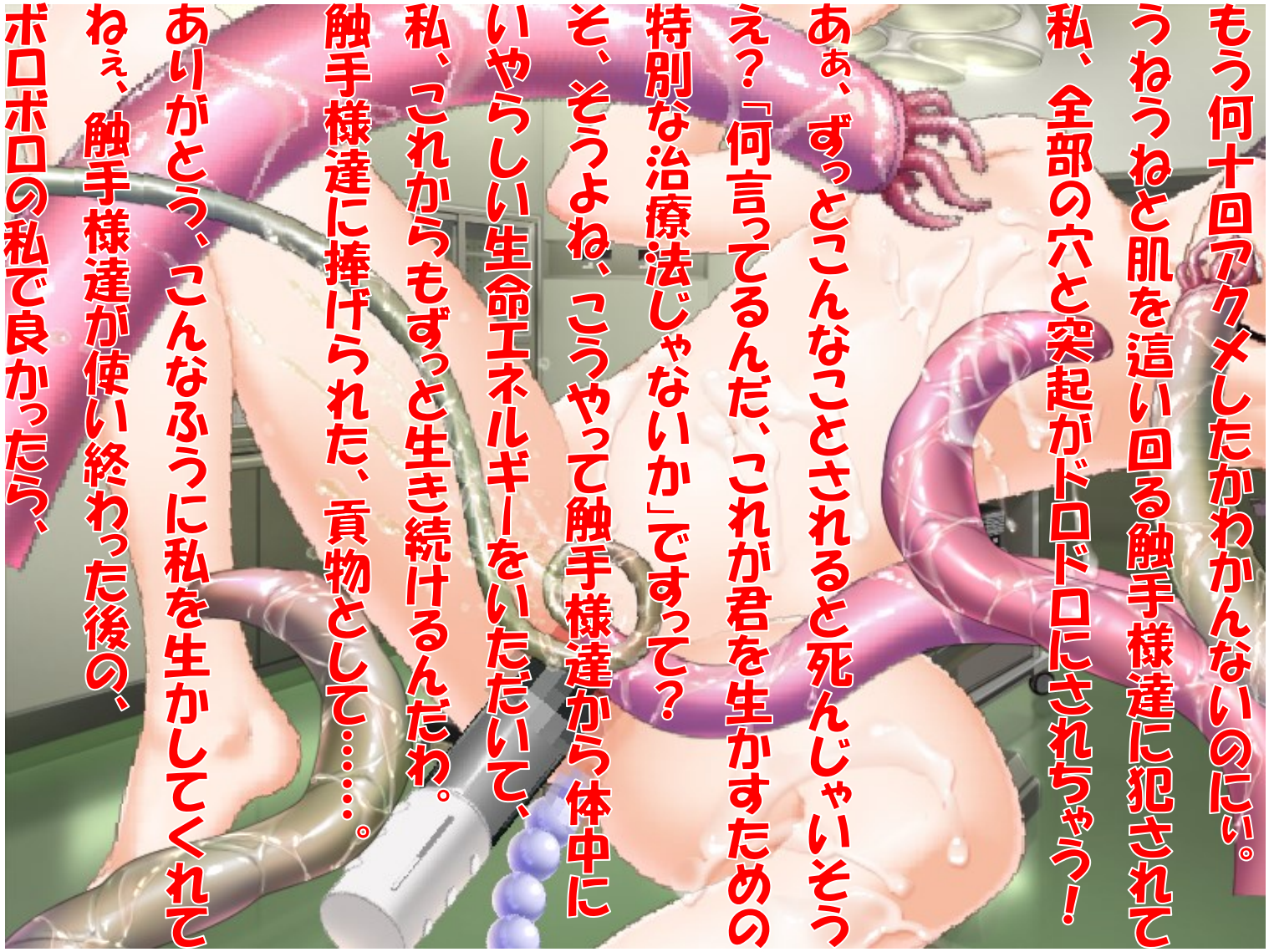
こ、これが特別な治療法なのよね？

「君の生命エネルギーを活性化させるんだよ」って、よくわからないけど、なんだか効きそう。だって私いま、これまで生きてきた中で、いちばんゾクゾクしちゃってるんだもの……。

ああ、体が熱い。奥からトロトロ溢れてきてる。おっぱいも、あそこも、すっごく気持ちいいの。

この治療法、体がどうにかなっちゃいそう……。

ああ、ダメぇ、またイクぅ。もうイカせないでぇ。
もう何十回アクメしたかわかんないのにぃ。
うねうねと肌を這い回る触手様達に犯されて、
私、全部の穴と突起がドロドロにされちゃう！



あぁ、ずっとこんなことされると死んじゃいそう。
え？「何言ってるんだ、これが君を生かすための、
特別な治療法じゃないか」ですって？
そ、そうよね、こうやって触手様達から体中に
いやらしい生命エネルギーをいただいて、
私、これからもずっと生き続けるんだわ。
触手様達に捧げられた、貢物として……。
ありがとう、こんなふうに私を生かしてくれて。
ねぇ、触手様達が使い終わった後の、
ボロボロの私で良かったら、
あなたの慰み者にも、なってあげるからね……。